

第 1 問 答 案 用 紙< 1 >  
(会 計 学)

問題 1

問 1

|                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| ①度外視法による場合の完成品総合原価  | ②度外視法による場合の月末仕掛品原価  |
| 749,115 千円          | 305,764 千円          |
| ③非度外視法による場合の完成品総合原価 | ④非度外視法による場合の月末仕掛品原価 |
| 644,400 千円          | 288,328 千円          |
| ⑤非度外視法による場合の減損費     |                     |
| 122,151 千円          |                     |

問 2

|                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| ⑥減損費の内訳(原料費)    | ⑦減損費の内訳(加工費)    |
| 85,880 千円       | 36,271 千円       |
| ⑧減損費負担後の完成品総合原価 | ⑨減損費負担後の月末仕掛品原価 |
| 744,975 千円      | 309,904 千円      |

問 3

度外視法では加工費完成品換算量の計算が不正確になるため、度外視法による場合と非度外  
 視法による場合とで減損に係る加工費の負担計算が異なるからである。

問 4

|     |     |     |     |     |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑪ か | ⑫ こ | ⑬ え | ⑭ け | ⑮ お |
|-----|-----|-----|-----|-----|

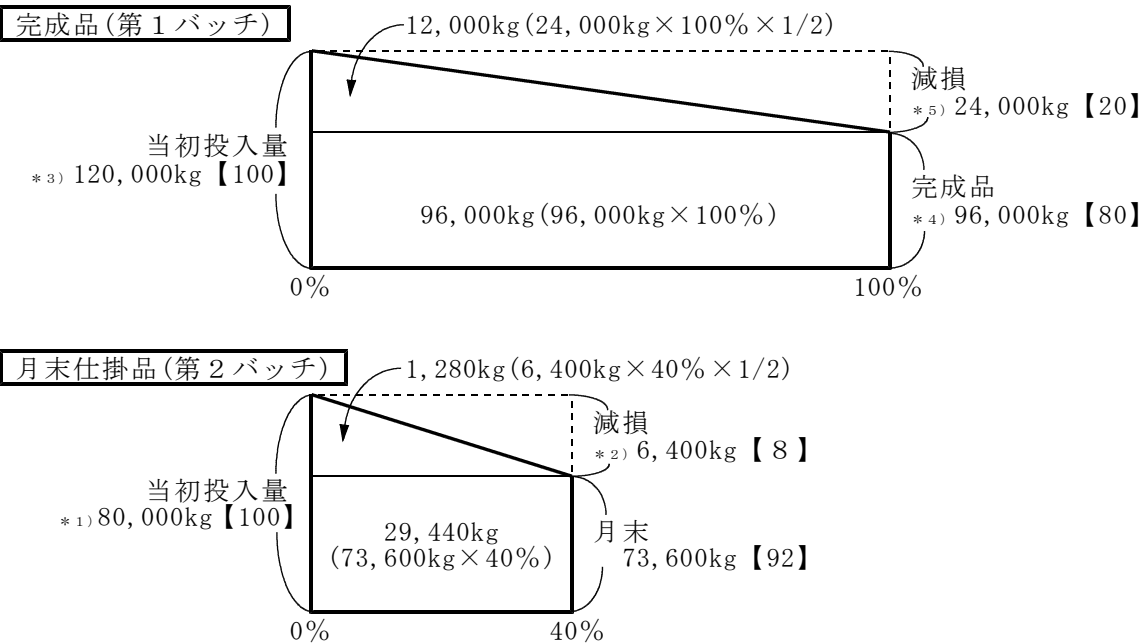
【解答への道】

＜第1問＞

問題 1

問 1      問 2

1. 数量の把握 (【    】内の数値は、当初投入量100に対する減損分と歩留分を示す。)



- \*1) 月末仕掛品73,600kg ÷ 0.92
- \*2) 当初投入量80,000kg - 月末仕掛品73,600kg
- \*3) 当初投入量合計200,000kg - 月末仕掛品当初投入量80,000kg
- \*4) 当初投入量120,000kg × 0.8
- \*5) 当初投入量120,000kg - 完成品96,000kg

2. 度外視法による計算

計算条件の(3)より、「完成品量と月末仕掛品量を当初投入量に換算」し、これに基づいて原価配分を行う。なお、B原料費は終点投入より、すべて完成品総合原価となる(以下同様)。

| A原料費       |           |    |           | 加工費           |           |    |              |
|------------|-----------|----|-----------|---------------|-----------|----|--------------|
| 合計         | 200,000kg | 完成 | 120,000kg | 合計            | 152,000kg | 完成 | 120,000kg    |
|            |           |    | 339,000千円 |               |           |    | 299,115千円    |
| 565,000千円  |           | 月末 | 80,000kg  | 378,879千円     |           | 月末 | *1) 32,000kg |
| (@2.825千円) |           |    | 226,000千円 | (@2.492625千円) |           |    | 79,764千円     |

\*1) 月末仕掛品当初投入量80,000kg × 加工費進捗度40%

完成品総合原価：A原料費339,000千円 + B原料費111,000千円 + 加工費299,115千円  
= **749,115千円 (①)**

月末仕掛品原価：A原料費226,000千円 + 加工費79,764千円 = **305,764千円 (②)**

### 3. 非度外視法による計算

#### (1) A原料費の配分

|                                  |             |                      |             |
|----------------------------------|-------------|----------------------|-------------|
| 当月投入<br>565,000千円<br>(200,000kg) | — @ 2.825千円 | × 完成品 96,000kg       | → 271,200千円 |
|                                  |             | × 減損(完成品分) 24,000kg  | → 67,800千円  |
|                                  |             | × 月末仕掛品 73,600kg     | → 207,920千円 |
|                                  |             | × 減損(月末仕掛品分) 6,400kg | → 18,080千円  |

#### (2) 加工費の配分

|                                  |               |                      |             |
|----------------------------------|---------------|----------------------|-------------|
| 当月投入<br>378,879千円<br>(138,720kg) | — @ 2.73125千円 | × 完成品 96,000kg       | → 262,200千円 |
|                                  |               | × 減損(完成品分) 12,000kg  | → 32,775千円  |
|                                  |               | × 月末仕掛品 29,440kg     | → 80,408千円  |
|                                  |               | × 減損(月末仕掛品分) 1,280kg | → 3,496千円   |

#### (3) 減損費負担前の完成品総合原価、月末仕掛品原価、減損費の計算

完成品総合原価：A原料費271,200千円＋B原料費111,000千円＋加工費262,200千円  
＝**644,400千円** (③)

月末仕掛品原価：A原料費207,920千円＋加工費80,408千円＝**288,328千円** (④)

減損費：A原料費(完成品分67,800千円＋月末仕掛品分18,080千円)  
＋加工費(完成品分32,775千円＋月末仕掛品分3,496千円)＝**122,151千円** (⑤)

#### (4) 減損費の内訳

A原料費：完成品分67,800千円＋月末仕掛品分18,080千円＝**85,880千円** (⑥)

加工費：完成品分32,775千円＋月末仕掛品分3,496千円＝**36,271千円** (⑦)

#### (5) 減損費負担後の完成品総合原価、月末仕掛品原価の計算

完成品総合原価：減損費負担前644,400千円  
＋減損費(A原料費67,800千円＋加工費32,775千円)＝**744,975千円** (⑧)

月末仕掛品原価：減損費負担前288,328千円  
＋減損費(A原料費18,080千円＋加工費3,496千円)＝**309,904千円** (⑨)

#### 問 3

解答を参照のこと。

#### 問 4

解答を参照のこと。

この解答速報の著作権はT A C (株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

<メモ>

第 1 問 答 案 用 紙< 2 >  
( 会 計 学 )

問題 2

問 1

| 直接材料費差異 |             |           | 直接労務費差異 |           |           |
|---------|-------------|-----------|---------|-----------|-----------|
| 価格差異    | 2,484,000 円 | ( 不利 ) 差異 | 賃率差異    | 81,000 円  | ( 不利 ) 差異 |
| 数量差異    | 396,000 円   | ( 不利 ) 差異 | 時間差異    | 120,000 円 | ( 不利 ) 差異 |

問 2

|      |      |      |             |      |
|------|------|------|-------------|------|
| ① 物量 | ② 価格 | ③ 能率 | ④ 176,000 円 | ⑤ 理想 |
|------|------|------|-------------|------|

問 3

メリット：新人工員の現在の生産性を反映した正常減損費を原価標準に含めることで、達成可能な標準となり、これを提示することで新人工員のモチベーションを維持することが可能となる。

⑦ たな卸資産価額

問 4

メリット：理想標準原価と実際原価との差異を把握することで、将来的に回避すべき全ての無駄を明らかにできるため原価管理に役立つ。また、理想標準原価は減損ゼロを目指すため、品質や業務能率の絶えざる改善を志向する経営管理と調和する。

問 5

根拠：原材料からは原則として原価差額が生じないとする税法との調整を図るため、材料受入価格差異を当年度の売上原価に全額を賦課することは認められていない。

問 6

⑩ 活動基準原価計算

意義：甲事業所では小ロット生産かつ段取替えが頻繁に生じるため、ロットごとの段取原価が少なくないと推定される。この場合、当該原価は操業度関連の配賦基準ではなく、バッチレベル・コスト・ドライバーによって発生するため、活動基準原価計算を採用することの効果が大きい。



問 2

1. 異常減損費の計算 (④)

異常減損は終点発生より，原価標準に異常減損量を乗じて算定すればよい。

原価標準8,800円×異常減損\*) 20個＝**176,000円**

\*) 減損60個－正常減損40個(＝完成品4,000個×正常発生率1%)

2. 語句穴埋め (①～③および⑤)

解答を参照のこと。

問 3

解答を参照のこと。

問 4

解答を参照のこと。

問 5

解答を参照のこと。

問 6

解答を参照のこと。

この解答速報の著作権はT A C (株)のものであり，無断転載・転用を禁じます。

<メモ>

第 2 問 答 案 用 紙< 1 >  
( 会 計 学 )

問題 1

問 1

20X1年度の投下資本に対する税引後営業利益の割合は3.6%であり、加重平均資本コスト3.7%を下回っていることから、投資家の要求に応じているとは言えない。投資家の要求に応えるためには、資本コストを意識した経営を行うべきである。

問 2

|    |                  |    |      |
|----|------------------|----|------|
| 名称 | インタレスト・カバレッジ・レシオ | 数値 | 2.2倍 |
|----|------------------|----|------|

問 3

利益指標の金額は1,250百万円であり、国ごとに異なる金利・税率・減価償却方法の影響を排除できるため、比較可能性が高い。

問 4

設問 1

|          |          |          |
|----------|----------|----------|
| 売上債権回転期間 | 棚卸資産回転期間 | 仕入債務回転期間 |
| 32.5 日   | 47.7 日   | 34.6 日   |

設問 2

利益が含まれている売上高ではなく、利益を含まない売上原価を用いることで、理論的に正しい回転期間を計算することができる。

問 5

設問 1

2,100 百万円

設問 2

資金の調達と運用の観点からA社の長期的な財務安全性への影響を検討する場合、固定比率と固定長期適合率がある。A社の固定比率は518.9%、固定長期適合率は82.7%となり、固定長期適合率でみると一応の目安である100%を下回っているため、影響は与えないと考えられる。

【解答への道】

<第2問>

問題 1

問 1

1. 投下資本に対する税引後営業利益の割合（金額単位：百万円）

税引後営業利益<sup>\*1)</sup> 534 ÷ 平均投下資本<sup>\*2)</sup> 14,785 × 100 = 3.61... → **3.6%**

<sup>\*1)</sup> 営業利益890 (= 売上高28,800 - 売上原価23,000 - 減価償却費180  
- その他の販売費及び一般管理費4,730) × (1 - 実効税率40%)

<sup>\*2)</sup> (期首投下資本<sup>\*3)</sup> 14,610 + 期末投下資本14,960) ÷ 2

<sup>\*3)</sup> 有利子負債12,000 (= 短期借入金5,000 + 長期借入金7,000)  
+ 自己資本2,610 (= 株主資本2,500 + その他の包括利益110)

2. 加重平均資本コスト（金額単位：百万円）

| 調達源泉  | 金額     | 構成比率                    | 源泉別資本コスト          | 加重平均資本コスト                   |
|-------|--------|-------------------------|-------------------|-----------------------------|
| 有利子負債 | 12,000 | <sup>*1)</sup> 82.1...% | <sup>*2)</sup> 4% | <sup>*3)</sup> 1.97...%     |
| 自己資本  | 2,610  | 17.8...%                | 9.4%              | 1.67...%                    |
| 合 計   | 14,610 | 100 %                   |                   | <sup>*4)</sup> <b>3.7 %</b> |

<sup>\*1)</sup> 有利子負債12,000 ÷ 合計14,610 × 100

<sup>\*2)</sup> 支払利息480 ÷ 有利子負債12,000 × 100

<sup>\*3)</sup> 4% × (1 - 税率40%) × 82.1...%

<sup>\*4)</sup> 加重平均資本コスト3.65... → 3.7%

3. 経営者が採るべき経営方針

解答を参照のこと。

問 2

インタレスト・カバレッジ・レシオ

事業利益1,070百万円 (= 営業利益890百万円 + 受取利息配当金180百万円)

÷ 支払利息480百万円 = 2.22... → **2.2倍**

問 3

1. 国際的に他社との比較可能性が最も高い利益指標

国際的に他社との比較可能性が最も高い利益指標としては、EBITDA (Earnings Before Interest Taxes Depreciation and Amortization) が該当し、その金額は以下の通りである。

営業利益890百万円＋減価償却費180百万円＋受取利息配当金180百万円＝**1,250百万円**

(注) 実務上、簡便的に「営業利益＋減価償却費」で計算されることもあるが、受取利息配当金が与えられているため、これを考慮すべきである。

2. EBITDAが国際的に他社との比較可能性が最も高い利益指標である根拠

解答を参照のこと。

問 4

1. 売上債権回転期間、棚卸資産回転期間及び仕入債務回転期間

|                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 売上債権回転期間           | * 1) <b>32.5</b> 日 |
| 棚卸資産回転期間           | * 2) <b>47.7</b> 日 |
| 仕入債務回転期間           | ∴ <b>34.6</b> 日    |
| キャッシュ・コンバージョン・サイクル | 45.6 日             |

$$\begin{aligned} * 1) \quad & \frac{(\text{期首残高}2,450\text{百万円} + \text{期末残高}2,680\text{百万円}) \div 2}{\text{売上高}28,800\text{百万円} \div 365\text{日}} = 32.50\cdots \rightarrow 32.5\text{日} \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} * 2) \quad & \frac{(\text{期首残高}3,640\text{百万円} + \text{期末残高}3,890\text{百万円}) \div 2}{\text{売上高}28,800\text{百万円} \div 365\text{日}} = 47.71\cdots \rightarrow 47.7\text{日} \end{aligned}$$

2. 棚卸資産回転期間の計算に1日当たり売上原価を用いる方法の利点

解答を参照のこと。

問 5

1. B社の株式価値に基づく取得原価

(フリー・キャッシュ・フロー370百万円÷加重平均資本コスト\*) 3.7%

－長期借入金6,500百万円)×取得持分60%＝**2,100百万円**

\*) 問題文「〔資料Ⅰ〕から計算」より、**問 1** で計算した数値を用いればよい。

## 2. 20X2年度期首のA社連結貸借対照表(金額単位:百万円)

| 科 目      | 金 額        | 科 目      | 金 額        |
|----------|------------|----------|------------|
| 流動資産     | 12,420     | 流動負債     | 8,570      |
| 現金及び預金   | *1) 1,000  | 仕入債務     | *1) 3,300  |
| 売上債権     | *1) 3,970  | 短期借入金    | *1) 5,000  |
| 棚卸資産     | *1) 6,060  | その他の流動負債 | *1) 270    |
| 有価証券     | *1) 1,030  | 固定負債     | 15,600     |
| その他の流動資産 | *1) 360    | 社債       | *3) 2,100  |
| 固定資産     | 15,358     | 長期借入金    | *1) 13,500 |
| 有形固定資産   | *1) 13,500 | 負債合計     | 24,170     |
| のれん      | *2) 1,128  | 株主資本     | *4) 2,840  |
| 投資有価証券   | *1) 730    | その他の包括利益 | *4) 120    |
|          |            | 非支配株主持分  | *5) 648    |
|          |            | 純資産合計    | 3,608      |
| 資産合計     | 27,778     | 負債・純資産合計 | 27,778     |

\*1) [資料Ⅰ] A社貸借対照表数値 + [資料Ⅱ] B社貸借対照表数値

\*2) 取得価額2,100百万円 - B社20X2年度期首株主資本1,620百万円 × 取得持分60%

\*3) B社の株式価値に基づく取得原価

\*4) [資料Ⅰ] A社貸借対照表数値

\*5) B社20X2年度期首株主資本1,620百万円 × (1 - 取得持分60%)

## 3. 固定比率及び固定長期適合率

固 定 比 率 :  $\frac{\text{固定資産} 15,358 \text{ 百万円}}{\text{自己資本} 2,960 \text{ 百万円} (= 2,840 + 120)} \times 100 = 518.85\cdots \rightarrow \mathbf{518.9\%}$

固定長期適合率 :  $\frac{\text{固定資産} 15,358 \text{ 百万円}}{\text{自己資本} 2,960 \text{ 百万円} + \text{固定負債} 15,600 \text{ 百万円}} \times 100 = 82.74\cdots \rightarrow \mathbf{82.7\%}$

## 4. 資金の調達と運用の観点から長期的な財務安全性への影響

解答を参照のこと。

第 2 問 答 案 用 紙 < 2 >

( 会 計 学 )

問題 2

問 1

|       |            |            |
|-------|------------|------------|
| ア     | イ          | ウ          |
| 4     | 4          | 24,000,000 |
| エ     | オ          | カ          |
| 6,400 | 42,000,000 | 25         |

問 2

|    |      |    |              |
|----|------|----|--------------|
| 用語 | 機会損失 | 金額 | 18,000,000 円 |
|----|------|----|--------------|

問 3

固定費の変動費化によって，営業量が下落するような状況であっても，赤字のリスクを小さくすることが可能となる。

問 4

目標増収率を設定し，これを上回っているかどうかに基づき，製品 B についてブランドの確立を図るという施策の良否を判断すべきである。

問 5

設問 1

|              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| 20X1年度末      | 20X2年度末      | 20X3年度末      |
| 94,656,000 円 | 92,756,000 円 | 90,856,000 円 |

設問 2

正味現在価値が 131,960,144 円 となるため，

アタッチメントを購入し利用するのが { 有利である。  
不利である。 } (いずれかを○で囲む)

【解答への道】

<第2問>

問題 2

問 1

1. 製品A単位当たり直接材料消費量(ア)

(1) 製品A単位当たり売上総利益

製品A単位当たり直接材料消費量を $x$ (kg)とする(以下同様)。

|       |            |   |        |                      |
|-------|------------|---|--------|----------------------|
| 販売価格  |            |   |        | 100,000円             |
| 直接材料費 | 9,000円/kg  | × | $x$ kg | = 9,000 $x$          |
| 変動加工費 | 5,000円/時間  | × | 2時間    | = 10,000             |
| 固定加工費 | 12,500円/時間 | × | 2時間    | = 25,000             |
| 外注加工費 |            |   |        | 20,000               |
| 売上総利益 |            |   |        | 45,000 - 9,000 $x$ 円 |

(2) 製品A単位当たり直接材料消費量

$$\frac{\text{売上総利益}(45,000 - 9,000x \text{ 円})}{\text{販売価格}100,000 \text{ 円}} \times 100 = \text{売上高総利益率}9\%$$

$$\therefore x = 4 \text{ kg}$$

2. 製品Aを優先して生産販売する場合(売上が最大となるセールス・ミックス)

(1) 共通の制約条件(機械運転時間)単位当たり売上高

製品A: 100,000円/個 ÷ 2時間 = 50,000円

製品B: 150,000円/個 ÷ 4時間 = 37,500円

∴ 制約条件単位当たり売上高の大きい製品Aを優先的に販売する。

(2) 最適セールス・ミックス

製品A: 需要上限2,000個(2時間×2,000個=4,000時間, 残りは\*)4,000時間)

製品B: 1,000個(4,000時間÷4時間=1,000個≤需要上限1,600個)

\*) 最大機械運転時間8,000時間 - 製品A4,000時間

### 3. 製品B単位当たり直接材料消費量(イ)

#### (1) 製品A単位当たり貢献利益

|       |           |   |     |   |          |
|-------|-----------|---|-----|---|----------|
| 販売価格  |           |   |     |   | 100,000円 |
| 直接材料費 | 9,000円/kg | × | 4kg | = | 36,000   |
| 変動加工費 | 5,000円/時間 | × | 2時間 | = | 10,000   |
| 外注加工費 |           |   |     |   | 20,000   |
| 変動販売費 |           |   |     |   | 4,000    |
| 貢献利益  |           |   |     |   | 30,000円  |

#### (2) 製品B単位当たり貢献利益

製品B単位当たり直接材料消費量をy(kg)とする(以下同様)。

|       |           |   |     |   |                   |
|-------|-----------|---|-----|---|-------------------|
| 販売価格  |           |   |     |   | 150,000円          |
| 直接材料費 | 9,500円/kg | × | ykg | = | 9,500y            |
| 変動加工費 | 5,000円/時間 | × | 4時間 | = | 20,000            |
| 変動販売費 |           |   |     |   | 2,000             |
| 貢献利益  |           |   |     |   | 128,000 - 9,500y円 |

#### (3) 製品B単位当たり直接材料消費量

安全余裕率が16%であることから、損益分岐点比率は(1 - 16%)となる。

$$\{製品A 30,000円 \times 2,000個 + 製品B (128,000 - 9,500y円) \times 1,000個\} \times (1 - 16\%)$$

$$- 固定費_{*}) 126,000,000円 = 0$$

$$\therefore y = 4kg$$

\*) 固定加工費100,000,000円 + 固定販売費及び一般管理費26,000,000円

### 4. 来年度の営業利益(ウ)

#### (1) 製品B単位当たり貢献利益

$$128,000 - 9,500 \times 4 = 90,000円$$

#### (2) 来年度の営業利益

$$製品A 30,000円 \times 2,000個 + 製品B 90,000円 \times 1,000個 - 固定費 126,000,000円$$

$$= 24,000,000円$$

5. 製品Bを優先して生産販売する場合（営業利益が最大となるセールス・ミックス）

(1) セールス・ミックス（エ）

製品B：需要上限1,600個（4時間×1,600個＝**6,400時間**，残りは1,600時間）

製品A：800個（1,600時間÷2時間＝800個≤需要上限2,000個）

(2) 来年度の営業利益（オ）

$$\begin{aligned} & \text{製品A } 30,000\text{円} \times 800\text{個} + \text{製品B } 90,000\text{円} \times 1,600\text{個} - \text{固定費 } 126,000,000\text{円} \\ & \qquad \qquad \qquad = \mathbf{42,000,000\text{円}} \end{aligned}$$

(3) 安全余裕率（カ）

安全余裕率を $z$ （％）とすると，

$$\begin{aligned} & (\text{製品A } 30,000\text{円} \times 800\text{個} + \text{製品B } 90,000\text{円} \times 1,600\text{個}) \times (1 - z\%) \\ & \qquad \qquad \qquad - \text{固定費 } 126,000,000\text{円} = 0\text{円} \end{aligned}$$

$$\therefore z = \mathbf{25\%}$$

（参考）

共通の制約条件（機械運転時間）単位当たり貢献利益

製品A：30,000円÷2時間＝15,000円

製品B：90,000円÷4時間＝22,500円

∴ 制約条件単位当たり貢献利益の大きい製品Bを優先的に生産販売すれば，営業利益が最大化される。

**問 2**

**機会損失**

ある代替案のうち一つを選択することで獲得した利益と，最善の案から獲得できたであろう利益（機会原価）との差額を機会損失といい，その金額は以下の通りである。

$$\begin{aligned} & \text{営業利益最大化営業利益 } 42,000,000\text{円（オ）} - \text{売上最大化営業利益 } 24,000,000\text{円（ウ）} \\ & \qquad \qquad \qquad = \mathbf{18,000,000\text{円}} \end{aligned}$$

**問 3**

解答を参照のこと。

**問 4**

解答を参照のこと。

問 5

1. アタッチメントを購入する場合

(1) 生産販売量の組み合わせ

問題文の「正味現在価値が最大になるよう生産販売するものとする」との指示より、乙材料の購入による支出ができるだけ遅くなるよう、購入済乙材料を優先して使用する。

|           | 20X1年度     | 20X2年度  | 20X3年度 |
|-----------|------------|---------|--------|
| 製品B－N     | *1) 2,000個 | 2,000個  | 2,000個 |
| 製品B       |            |         |        |
| 購入済乙材料使用  | *3) 100個   | *4) 50個 |        |
| 新規購入乙材料使用 |            | 50個     | 100個   |

\*1) 需要上限2,000個(3時間×2,000個=6,000時間, 残りは\*2) 400時間)

\*2) 6,400時間(工)－製品B－N6,000時間

\*3) 400時間÷4時間=100個≤需要上限100個

かつ, 100個×乙材料消費量4kg(イ)=必要乙材料400kg≤購入済乙材料600kg

\*4) 購入済乙材料200kg(=600kg－400kg)÷乙材料消費量4kg(イ)=50個

(2) 製品単位当たり利益

機械運転時間に伴って発生する変動加工費は、アタッチメントを購入する場合と購入しない場合でも、6,400時間分が等しく発生するため考慮する必要は無い。

① 製品B－N

|           |           |   |     |          |
|-----------|-----------|---|-----|----------|
| 販売価格      |           |   |     | 200,000円 |
| 直接材料費     | 8,000円/kg | × | 5kg | = 40,000 |
| 変動販売費     |           |   |     | 2,000    |
| 製品単位当たり利益 |           |   |     | 158,000円 |

② 製品B(購入済乙材料使用)

|           |  |  |  |          |
|-----------|--|--|--|----------|
| 販売価格      |  |  |  | 150,000円 |
| 変動販売費     |  |  |  | 2,000    |
| 製品単位当たり利益 |  |  |  | 148,000円 |

③ 製品B(新規購入乙材料使用)

|           |           |   |     |          |
|-----------|-----------|---|-----|----------|
| 販売価格      |           |   |     | 150,000円 |
| 直接材料費     | 9,500円/kg | × | 4kg | = 38,000 |
| 変動販売費     |           |   |     | 2,000    |
| 製品単位当たり利益 |           |   |     | 110,000円 |

(3) 正味キャッシュフロー (CF)

| (単位：千円)           | 20X0年度   | 20X1年度      | 20X2年度      | 20X3年度      |
|-------------------|----------|-------------|-------------|-------------|
| 税引前CF(①)          |          | *1) 330,800 | *2) 328,900 | *3) 327,000 |
| ①×(1－税率40%)       |          | 198,480     | 197,340     | 196,200     |
| 減価償却費の法人税節約額      |          | *4) 16,000  | 16,000      | 16,000      |
| 購入済乙材料原価計上の法人税節約額 |          | *5) 1,520   | *5) 760     | —           |
| 設備投資額             | －120,000 | —           | —           | —           |
| 正味CF              | －120,000 | 216,000     | 214,100     | 212,200     |

\*1) 製品B－N158,000円×2,000個＋製品B（購入済乙材料使用）148,000円×100個

\*2) 製品B－N158,000円×2,000個＋製品B（購入済乙材料使用）148,000円×50個

＋製品B（新規購入乙材料使用）110,000円×50個

\*3) 製品B－N158,000円×2,000個＋製品B（新規購入乙材料使用）110,000円×100個

\*4) 減価償却費\*5) 40,000,000円×税率40%

\*5) 取得原価120,000,000円÷耐用年数3年

\*5) 購入済乙材料が売上原価に計上（＝損金算入）されることにともなう法人税節約額

20X1年度末：乙材料9,500円×400kg×税率40%

20X2年度末：乙材料9,500円×200kg×税率40%

## 2. アタッチメントを購入しない場合

### (1) 生産販売量

|       | 20X1年度          | 20X2年度 | 20X3年度 |
|-------|-----------------|--------|--------|
| 製品B-N | $\ast_1$ 1,280個 | 1,280個 | 1,280個 |

$\ast_1$   $6,400\text{時間} \div 5\text{時間} = 1,280\text{個} \leq \text{需要上限} 2,000\text{個}$

### (2) 正味CF

| (単位：千円)                         | 20X0年度         | 20X1年度           | 20X2年度  | 20X3年度  |
|---------------------------------|----------------|------------------|---------|---------|
| 税引前CF(①)                        |                | $\ast_1$ 202,240 | 202,240 | 202,240 |
| ① $\times (1 - \text{税率} 40\%)$ |                | 121,344          | 121,344 | 121,344 |
| 購入済乙材料の売却収入                     | $\ast_2$ 1,500 |                  |         |         |
| 材料売却損にともなう法人税節約額                | $\ast_3$ 1,680 |                  |         |         |
| 正味CF                            | 3,180          | 121,344          | 121,344 | 121,344 |

$\ast_1$  製品B-N  $158,000\text{円} \times 1,280\text{個}$

$\ast_2$  乙材料売却処分価格  $2,500\text{円} \times 600\text{kg}$

$\ast_3$  (乙材料購入価格(帳簿価格)  $9,500\text{円} - \text{乙材料売却処分価格} 2,500\text{円}) \times 600\text{kg} \times \text{税率} 40\%$

## 3. 差額CFと正味現在価値(設問1,2)

| (単位：千円)         | 20X0年度   | 20X1年度        | 20X2年度        | 20X3年度        |
|-----------------|----------|---------------|---------------|---------------|
| アタッチメントを購入する場合  | -120,000 | 216,000       | 214,100       | 212,200       |
| アタッチメントを購入しない場合 | 3,180    | 121,344       | 121,344       | 121,344       |
| 差引(差額CF)        | -123,180 | <b>94,656</b> | <b>92,756</b> | <b>90,856</b> |
| 現価係数            | 1        | 0.957         | 0.916         | 0.876         |
| 現在価値            | -123,180 | 90,585.792    | 84,964.496    | 79,589.856    |

正味現在価値：**131,960,144円**

$\therefore$  アタッチメントを購入し利用するのが**有利である**。

## I 合格ライン

### <第1問>

**問題 1** は、総合原価計算に関する問題である。計算は減損率が安定している場合の度外視法という見慣れない論点が含まれているが、それ以外は正答が望まれる。理論は **問 4** ⑪～⑫を正答し、それ以外で部分点を確保したい。

**問題 2** は、標準原価計算およびABCに関する問題である。計算は平易であるため正答が望まれる。理論は③⑤⑩の語句および用語を正答し、**問 5** 以外の論述で部分点を確保したい。

第1問は、7割程度の得点が求められる。

### <第2問>

**問題 1** は、財務情報分析、資金管理および分権組織とグループ経営に関する問題である。計算は **問 1** の財務指標および **問 4** 設問1を正答できれば十分である。理論は正答困難なものが多いが、**問 5** 設問2の財務指標の名称は正答したい。

**問題 2** は、CVP分析、業務的意思決定および設備投資意思決定に関する問題である。計算は難度が高く、**問 1** ア、エを正答できれば十分である。理論は **問 3** で部分点を確保したい。

第2問は、3割程度の得点が求められる。

以上より、単純合算すれば全体で5割程度の得点が求められることとなるが、本試験の緊張感などを考慮すると、合格ラインは4割5分程度になると予想される。

## Ⅱ 答練との対応関係

### <第1問>

#### 問題 1

基礎答練 第1回 第2問 **問題 1**  
応用答練 第2回 第1問 **問題 1**

アクセス 論文式 第3回 **問題 1**

#### 問題 2

基礎答練 第2回 第1問 **問題 1**  
基礎答練 第2回 第1問 **問題 2**  
応用答練 第2回 第1問 **問題 2**  
公開模試 第1回 第1問 **問題 2**

アクセス 論文式 第4回 **問題 1**

アクセス 論文式 第4回 **問題 2**

アクセス 論文式 第11回 **問題 2**

### <第2問>

#### 問題 1

応用答練 第2回 第2問 **問題 2**  
公開模試 第1回 第2問 **問題 2**  
公開模試 第2回 第2問 **問題 1**

アクセス 論文式 第6回 **問題 2**

#### 問題 2

基礎答練 第2回 第2問 **問題 1**  
基礎答練 第3回 第1問 **問題 2**  
応用答練 第1回 第2問 **問題 1**  
直前答練 第1回 第2問 **問題 2**  
公開模試 第1回 第2問 **問題 1**  
公開模試 第1回 第2問 **問題 2**  
公開模試 第2回 第2問 **問題 2**

アクセス 論文式 第5回 **問題 1**

アクセス 論文式 第8回 **問題 2**

アクセス 論文式 第9回 **問題 1**

アクセス 論文式 第9回 **問題 2**